

松 山 大 学 論 集
第 29 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 1 7 年 4 月 発 行

カズオ・イングロ『日の名残り』における自己物語
—— なぜステューブンスは旅に出たのか ——

新 井 英 夫

カズオ・イシグロ『日の名残り』における自己物語

—— なぜステイブンスは旅に出たのか ——

新 井 英 夫

1. 序論

長崎県長崎市新中川町で生を受けたカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro 1954-) は、長崎海洋気象台に勤務する父親がイギリスの研究所で働くことになり、五歳のときに家族で渡英する。家族はイギリスに一年間滞在することを予定していたが、その滞在は毎年延長され、やがて両親はイギリスでの永住を決意することとなる。イシグロは、1973年にグラマー・スクールを卒業した後、一年間のギャップ・イヤーを経て、ケント大学 (University of Kent) に入学。卒業後、一年間、ソーシャルワーカーの仕事に就いた後、イースト・アングリア (University of East Anglia) 大学の修士課程創作科に進み、コミック・ノベルの名手マルカム・ブラッドベリ (Malcolm Bradbury 1932-2000) と、マジック・リアリズムの旗手アンジェラ・カーター (Angela Carter 1940-1992) の薫陶を受け、創作活動を本格的に開始する。イシグロはこれまでに『遠い山なみの光』 (*A Pale View of Hills* 1982), 『浮世の画家』 (*An Artist of the Floating World* 1986), 『日の名残り』 (*The Remains of the Day* 1989), 『充たされざる者』 (*The Unconsoled* 1995), 『わたしたちが孤児だったころ』 (*When We Were Orphans* 2000), 『わたしを離さないで』 (*Never Let Me Go* 2005), 『忘れられた巨人』 (*The Buried Giant* 2015) の合計七編の長編小説を上梓している。イシグロが柴田元幸との対談において “When I try to move away from traditional realist fiction, I do it not so much in terms of language, but more in terms of relationship to the everyday reality that

we live in. I think this is a very exciting area for fiction” (210) と自負していることから明らかなおと、現在、彼は新しい文学の形を模索し続けることで、ノーベル文学賞 (Nobel Prize in Literature) の受賞に最も近い人物の一人と評されるまでの地位を獲得するに至っている。

本論文で扱う1989年のブッカー賞 (The Booker-McConnell Prize for Fiction) 受賞作品『日の名残り』は、長崎を想起させる戦後の日本を舞台とした前二作とは大きく異なり、物語全体の舞台をイギリスに置いている。これはいみじくもバリー・ルイス (Barry Lewis) が指摘しているように、“Ishiguro was eager to escape from the stereotyping of his first two books as Japanese” (74) ことが大きく影響していると考えられる。イシグロは『日の名残り』において、古き良き時代のイギリスの権化といえる執事を主人公に据え、“a super-English novel” (Vorda and Herzinger 73) と称するほどにイギリス性を強調したが、「相変わらず批評家は、私の表現の中にジャパニーズネスを見つけたがるでしょう」(池田186) というイシグロの予想通り、『日の名残り』というイギリス小説の中にイシグロの日本人性を見出そうと試みる批評家²が少なからず現れ、イシグロの期待を裏切る結果となった。ピコ・ライヤー (Pico Lyre) もその一人であり、“*The Remains of the Day* is, as its title suggests, written in that favorite Japanese form, the elegy far vanished rites” (586) などと論じている。しかしながら、ライヤーは同論文中においてスティーブンス (Stevens) の造形について “For Ishiguro’s butler is so English that he could be Japanese, in his finely calibrated sense of rank, his attention to minutiae, his perfectionism and his eagerness to please: his pride is his subservience, and his home is only in the past” (586) という大変興味深い論を披露している。これはイシグロが「ある問題意識、テーマをもって、それを表現するのに最も適していると思われる舞台を選んでいるのです。私は常に小説の舞台にはかなり自由が許されると信じていました」(青木304) と、小説の舞台設定が「単なる技術の一部」(大野143) であると主張していることと重なる。『遠い山なみの光』、『浮世の画家』、『日の名残り』

は、過去において一つの価値観に従って自己のアイデンティティを形成してきたセイジ・オガタ (Seiji Ogata), マスジ・オノ (Masuji Ono), スティーブンスが、それぞれ時代とともに変わりゆく社会的価値観や自分自身の境遇によって、アイデンティティ・クライシスに陥る姿を描いている。つまり、三者は同根から生えた人間であり、この三作品は一つの主題を日本とイギリスとそれぞれの舞台に振り分けたものにすぎないと言えるのではないだろうか。

したがって、本論文では、これまで多くの批評家によって論じられてきた『日の名残り』における語り的手法による分析を基礎に、『遠い山なみの光』と『浮世の画家』に関する拙論で扱った臨床社会学の分野で用いられる「自己物語論」という考え方を、『日の名残り』にも援用して論じることで、なぜ主人公スティーブンスが三十八年にも及ぶダーリントン・ホール (Darlington Hall) における執事人生³を振り替えざるを得なかったのか、その理由と目的の解明、そして振り返った結果どのような自己調整に至ったのかについて論じてみたいと思う。

2. ミス・ケントンからの手紙

スティーブンスは、二十年前までダーリントン・ホールに勤め、有能なハウスキーパー (housekeeper) であったミス・ケントン (Miss Kenton, 現在は結婚してベン夫人 (Mrs Benn)) から七年ぶりの手紙を受け取る。スティーブンスは、この手紙の中に書かれた “an unmistakable nostalgia for Darlington Hall” (10) や “a distinct hint of her desire to return here” (10) という文言からミス・ケントンの邸に対する郷愁を感じ取るだけでなく, “Although I have no idea how I shall usefully fill the remainder of my life . . . The rest of my life stretches out as an emptiness before me” (51) という文言から、結婚生活が破綻しかかっており、邸に戻る事ができればという想いが彼女の大きな支えになっていると読み取り、ミス・ケントンに再び邸に戻って働いてもらうことで、邸の人手

不足の状況を解消しようとする。これをきっかけに、スティーブンスは、現在のダーリントン・ホールの主人であるアメリカ人の資産家ファラディ (Mr Farraday) が所有するフォード (Ford) で一人西部地方に旅に出る決意をするに至るのである。確かに、スティーブンスは“unmistakable”や“quite sure” (10) と断定的語句を用いてミス・ケントンの手紙に対する自らの解釈に自信を見せている。しかしながら、スティーブンスは舌の根の乾かぬうちに“Not only was I unable to be certain of Miss Kenton’s desire to rejoin the staff here . . .” (14) と言ったり、旅の二日目の朝に“Admittedly, she does not at any point in her letter state explicitly her desire to return” (50) とわざわざ断りを入れたりするなど、自らの自信に揺らぎを見せている。さらに三日目の朝にスティーブンスは“I must say I was a little surprised last night at how difficult it was actually to point to any passage which clearly demonstrated her wish to return” (149) と語り、同日夜にミス・ケントンの手紙を読み返したスティーブンスは、“I may well have read more into certain of her lines than perhaps was wise” (189) と、自らが彼女の手紙に実際以上のことを読み込んでいたことを暴露し、手紙からミス・ケントンの真意を測ることの困難さを示している。そして最終的には、スティーブンスとミス・ケントンの二人が再会の別れを迎えるリトル・コンプトン (Little Compton) のバス停において、スティーブンスはミス・ケントンに直接手紙の真意について、問いかけずにはいられなくなるのである。

‘ But the fact is, the letters I have had from you over the years, and in particular the last letter, have tended to suggest that you are – how might one put it? – rather unhappy. I simply wondered if you were being ill-treated in some way. Forgive me, but as I say, it is something that has worried me for some time. I would feel foolish had I come all this way and seen you and not at least asked you.’ (250)

このようなスティーブンスのミス・ケントンからの手紙に関する解釈の揺らぎから鑑みても明らかであるが、そもそもミス・ケントンに復職の意志があると確信を持っていたのであれば、スティーブンスはわざわざ旅に出る必要はなく、邸に留まったまま、彼女に受け入れ承諾の返信を出すことで十分事足りたはずである。つまり、スティーブンスは当初から手紙の中にミス・ケントンの復職の意志を読み取っていなかったのではないだろうか。スティーブンスはミス・ケントンの手紙を受け取る前、ファラディからの休暇を取得して旅行してはどうかという提案を受け入れずにいたが、それはスティーブンスが「偉大な執事」(a great butler)であることを旨とし、邸にいることこそ、最良のイギリスを見る機会であると考えていたからである。これまでスティーブンスは、数日の休みも取得することなく、また適当な旅行用の服を持たぬほど執事業に精を出し続けてきた人物である。にもかかわらず、スティーブンスにダーリントン・ホールから一時的に離れさせ、旅行に出かけようと決意させるに至らしめたものとは、いったい何なのだろうか。

スティーブンスが物語る現在は、第二次世界大戦 (World War II) が終結してから十年ほど経過した1956年7月に設定されている。スティーブンスがかつて仕えていたダーリントン卿 (Lord Darlington) は三年前の1953年にすでにこの世を去り、現在ダーリントン・ホールはファラディの所有となり、スティーブンスはファラディの下で執事を務めている。スティーブンスは物語る現在において、時代とともに変わりゆく社会的価値観や自分自身の境遇について行くことができず、大きな精神的不安を抱え、アイデンティティ・クライシスの状態に陥っているのではないだろうか。この精神的不安こそがスティーブンスをダーリントン・ホールから一時的に離れさせ、旅行へと駆り立たせたのではないだろうか。

3. スティーブンスの精神的不安(1)——コミュニケーション

スティーブンスが大きな精神的不安を抱える第一の要因は、スティーブンスが雇主であるファラディとコミュニケーションを円滑に図ることができず、満足のいく執事業を行うことができないことにある。長年仕えてきたダーリントン卿と異なり、ファラディはアメリカ的冗談 (the sort of bantering) を好む人物であり、スティーブンスにもたびたび冗談を言うが、スティーブンスはそれが冗談であると気づくことすらできず、また冗談であると気づいたとしても、
 “Nevertheless, I could never be sure exactly what was required of me on these occasions. Perhaps I was expected to laugh heartily; or indeed, reciprocate with some remark of my own” (16) と、どのように対応すればよいのか分からず、困惑することも少なくない状況にある。“in America, it is all part of what is considered good professional service that an employee provide entertaining banter” (16) と聞いたスティーブンスは、ここ数か月間、ラジオ番組を参考に “to formulate three witticisms based on my immediate surroundings at that moment” (139) や “to think of three witticisms based on the events of the past hour” (139) などの練習をして、ファラディの冗談に自信を持って応答することができるよう不断な努力を重ねている。しかしこのような努力にもかかわらず、残念ながらスティーブンスの冗談は望むような効果を上げることができずにいる。ダーリントン・ホールでの朝食時においてファラディに対して発せられたジプシーをツバメに例えての洒落は、ファラディに洒落であることすら気づいてもらえず、“I beg your pardon, Stevens?” (17) と聞き返される始末であり、スティーブンスは急用を思い出したふりをして早々に退散するしかない。スティーブンスは “The great butlers are great by virtue of their ability to inhabit their professional role and inhabit it to the utmost” (43) であると考え、長年にわたり執事業を営んできたが、主人が代わり、自分に求められる役務も大きく変化した物語る現在において、執事業に対して “not a duty I feel I can ever discharge

with enthusiasm” (16) と限界を感じ、精神的不安を抱えるに至っているのである。

4. スティーブンスの精神的不安(2)—— 老い

スティーブンスが抱える精神的不安の第二の要因として「老い」を挙げることができる。スティーブンスはこれまで執事として「完全主義」(perfectionism)を追及⁴してきたが、物語る現在における“The fact is, over the past few months, I have been responsible for a series of small errors in the carrying out of my duties” (5) という彼自身の告白からも明らかのように、その不完全さを露呈せざるを得ない状況に陥っている。スティーブンスはこのような過ちを犯すようになった要因が“a faulty staff plan” (5) に帰すると説明するが、ダーリントン卿とは異なりファラディは大勢の要人を邸に迎えることがなく、また召使い部屋の並ぶ一角と、三階の客室廊下は防塵シートで閉鎖していることから、スティーブンスの執事としての業務量はダーリントン卿時代より格段に少なく、たとえ雇人が4人⁵のみであったとしても、スティーブンスが主張する“a staff shortage” (51) の状況に至っているとは考えられない。つまり、スティーブンスは「信頼できない語り手」(unreliable narrator)⁶であり、物語る現在において、自身の肉体的老化や老齢による能力の衰えを直視することができず、それを隠蔽し、過ちの全てを職務計画の不備にあると責任転嫁し、自らを納得させようとしているのである。このような状況下において、スティーブンスはミス・ケントンからの手紙の中に、彼女の結婚生活が破綻しかかっており、邸に戻ることができればという想いが彼女の大きな支えになっていると読み取り、ミス・ケントンに再び邸に戻って働いてもらうことで、人手不足の状況を解消しようとする。しかしながら、ミス・ケントン自身、手紙の内容について、スティーブンスの解釈が誤りであると指摘している。

‘Well, for instance, Mrs Benn,’ I said with a laugh, ‘at one point in your letter, you write – now let me see – “the rest of my life stretch out like an emptiness before me”. Some words to that effect.’ ‘Really, Mr Stevens,’ she said, also laughing a little. ‘I couldn’t have written any such thing.’ ‘Oh, I assure you you did, Mrs Benn. I recall it very clearly.’ ‘Oh dear. Well, perhaps there are some days when I feel like that. But they pass quickly enough. Let me assure you, Mr Stevens, my life does not stretch out empty before me’
(248-49)

これまで多くの批評家によって指摘されてきたとおり、スティーブンスが「信頼できない語り手」であるとするならば、スティーブンスが語るミス・ケントンの手紙の内容は、その解釈が時間とともに揺らぎを見せていることから明らかなように、極めて信頼性が低いものであると言わざるを得ない。物語る現在において、スティーブンスには老いの問題が大きな影を落としていることを鑑みれば、彼がミス・ケントンの手紙に読み取っていた彼女の未来の人生に対する虚無感は、実は自分自身の老いに対する精神的不安を表したものであったと考えられないだろうか。つまり、老いにより執事としての役務を十分に果たすことが難しくなっていることを真正面から受け止めることができないスティーブンスが、無意識的に自らの精神的不安をケントンの手紙に読み込んでいたのである。確かにスティーブンスは老いによって執事の役務を完全にこなすことが難しくなっているが、その過ちの程度は小さなもの（small errors）にとどまっている。にもかかわらず、なぜスティーブンスは自身の未来の人生に対して虚無を感じるまでの精神的不安定さを抱え込まなければならなかったのだろうか。

超一流の執事しか入会させないことを謳い文句にしていたヘイズ協会（the Hayes Society）は、入会条件として “the applicant be possessed of a dignity in keeping with his position. No applicant will satisfy requirements, whatever his level

of accomplishments otherwise, if seen to fall short in this respect” (33) と見解を示している。つまり、「偉大なる執事」であるためには「品格」(dignity)を有していることが必要不可欠なのである。“It is surely a professional responsibility for all of us to think deeply about these things so that each of us may better strive towards attaining ‘dignity’ for ourselves” (45) と語るスティーブンスは、執事としての円熟期にあったラフバラ・ハウス (Loughborough House) 時代の父親を “the embodiment of dignity” (35) と称え、執事としての目標に据え、これまで精進してきたのである。だからこそ、スティーブンスは、ジョン・シルバース (John Silvers) が亡くなり、ラフバラ・ハウスの名執事としての役割を終えた七十一歳になる父親を、1922年の春、ハウスキーパーのミス・ケントンとほぼ同時期に、ダーリントン・ホールに副執事 (under-butler) として雇い入れたのである。しかしながら、執事としての円熟期をとくに過ぎたスティーブンス・シニア (Mr Stevens senior) は、ダーリントン・ホールにおいて役務上の些細な過ちを繰り返してしまう。スティーブンスは、父親の過ちの危険性について、ミス・ケントンから忠告を受けるが、“Miss Kenton, I believe you are according this matter an urgency it hardly merits” (60) と一蹴してしまう。スティーブンスは、執事としての父親を尊敬し、目標の対象としてきただけに、父親の失敗は受け入れがたいものだったのである。しかしながら、ヴェルサイユ条約 (Treaty of Peace between the Allied and Associated Powers and Germany 1919)⁸ による対ドイツ制裁⁹の緩和を実現するための非公式国際会議 (an ‘unofficial’ international conference) がダーリントン・ホールで開催される直前、スティーブンス・シニアは東屋 (summerhouse) にいる客人に茶菓子を運ぶ役務中、板石に躓いて転倒し、お盆に載せていたサンドイッチやケーキを、ティーポット、カップ、皿とともに石段近くの芝生にばら撒くという大失態を犯してしまう。これまで父親の小さな過ちについて見て見ぬふりをしてきたスティーブンスであるが、ダーリントン卿から “These errors may be trivial in themselves, Stevens, but you must yourself realize their larger significance. Your father’s days of

dependability are now passing. He must not be asked to perform tasks in any area where an error might jeopardize the success of our forthcoming conference” (65) と指摘され、父親を国際会議に係る重要な役務から外さざるを得ない状況となる。

ダーリントン卿がその開催を重要視し、尽力してきた非公式国際会議を邸で開催するにあたり、使用人たちは一分一秒も無駄にできないほどの忙しさの中に置かれていた。そのためスティーブン・シニアも副執事として活動を制限されていたとはいえ、当然使用人の一人として一定の働きが求められていた。しかしながら、その会議の最中に卒中 (stroke) を起こし、ミス・ケントンに看取られ、最期を遂げることとなる。副執事としての職務能力を疑問視され、自尊心を大きく傷つけられたスティーブンス・シニアは、自らの名誉を回復するどころか、最も自分が必要とされる日に人生の幕を下ろしてしまうのである。

スティーブンスは、自らが執事に求められる「品格の体現者」であると尊敬し、目標としてきた父親の老いと最期を目の当たりにしたことにより、そのときの父親と同じくらいの年齢に達した物語る現在において、父親と自分を重ね合わせ精神的不安を抱えるに至ったのではないだろうか。つまり、老いた父親の姿を記憶に持つスティーブンスは、自らの執事としての些細な過ちの繰り返しだが、いずれ大きな過ちに通じるものであることを感じ取り、すでに自らが執事の職業に適さなくなっている現実を理解し、自身の未来の人生に対して虚無を感じるまでの精神的不安定さを抱え込んでいるのである。

5. スティーブンスの精神的不安(3)——ダーリントン卿の評価

スティーブンスが抱える精神的不安の第三の要因として、時代の変化による周囲のダーリントン卿に対する評価を挙げることができる。ダーリントン卿は1920年暮れに初めてベルリン (Berlin) を訪問したことをきっかけに、“Deeply disturbing. It does us great discredit to treat a defeated foe like this. A complete

break with the traditions of this country” (74) と話すなど、ヴェルサイユ条約による対ドイツ制裁に疲弊するベルリンの状況に衝撃を受ける。さらにダーリントン卿は、親友カール＝ハインツ・ブレマン (Karl-Heinz Bremann) が、ハンブルク (Hamburg) からベルリンへ向かう列車の中で拳銃自殺したことにより、ドイツの危機という問題にますます多くの時間を費やすようになる。このダーリントン卿の行動は、この世に正義を見たいという真摯な願いから生じたものであった。ダーリントン卿は屋敷にダニエルズ卿 (Lord Daniels), ジョン・メイナード・ケインズ (Mr John Maynard Keynes 1883-1946)¹⁰ H. G. ウェルズ (Herbert George Wells 1866-1946)¹¹ などの著名人を招待し、彼らとこれらの問題の解決策について話し合いを続けるほか、デイヴィッド・カーディナル (David Cardinal) の協力を得て、考えを同じくする人々や、ドイツの状況は放置できないという信念を分かち合う人々の輪を着実に広げる。その輪はイギリス人やドイツ人だけでなく、ベルギー人、フランス人、イタリア人、スイス人も含んだものであり、また外交官や政府高官はもちろんのこと、著名な聖職者、退役軍人、作家、思想家を含む幅広い輪に広がっている。そして1923年3月には、ダーリントン・ホールで、アメリカの上院議員ルイス (Mr Lewis) やフランスの政治家デュポン (M. Dupont) などの賛同者のうち特に影響力の大きな人物を招き、公式の国際会議に相当な影響を及ぼし得ることになろう非公式な国際会議を開催するにまでこぎつけている。さらに1936年にスティーブンスは、ヨーロッパに平和が続くことを望み、首相のスタンリー・ボールドウィン (Stanley Baldwin 1867-1947), 外相のロバート・アンソニー・イーデン (Robert Anthony Eden 1897-1977), そしてドイツ駐英大使のウルリヒ・フリードリヒ・ヴァイルヘルム・ヨアヒム・フォン・リッベントロップ (Ulrich Friedrich Wilhelm Joachim von Ribbentrop 1893-1946)¹² を邸に招待し、国王ジョージ六世 (George VI 1895-1952) のアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler 1889-1945) 訪問を提案し説得を試みている¹³。これらの活動を見るに、ダーリントン卿は外務省 (Foreign Office) に勤めていたころの人脈を生かし、社会に対して大きな影

響力を持つ人物であったことが分かる。ステイーブンスは、このように車輪に例えられた世界の中心で世界を動かしていたダーリントン卿に仕えていたことを誇りに思っている。

... one has had the privilege of practising one's profession at the very fulcrum of great affairs. And one has a right, perhaps, to feel a satisfaction those content to serve mediocre employers will never know – the satisfaction of being able to say with some reason that one's efforts, in however modest a way, comprise a contribution to the course of history. (147)

しかしながら、1923年に行われた非公式国際会議の出席者の一人であるアメリカ人の上院議員ルイスは、ダーリントン卿を“a classic English gentleman” (106) と呼び、ダーリントン卿らの手法は、時代遅れの政治的アマチュアリズムに過ぎず、現代の国際政治の中では専門家が必要なのであり、このような会議は全くの無益であると痛烈に批判する。

‘. . . . You gentlemen here, forgive me, but you are just a bunch of naive dreamers. And if you didn't insist on meddling in large affairs that affect the globe, you would actually be charming. Let's take our good host here. What is he? He is a gentleman. No one here, I trust, would care to disagree. A classic English gentleman. Decent, honest, well-meaning. But his lordship here is an amateur. . . . The days when you could act out of your noble instincts are over. Except of course, you here in Europe don't yet seem to know it. Gentlemen like our good host still believe it's their business to meddle in matters they don't understand. So much hog-wash has been spoken here these past two days. Well-meaning, naive hogwash. You here in Europe need professionals to run your affairs. . . .’ (106-07)

ダーリントン卿はルイスの批判に対して動じることなく “What you describe as ‘amateurism’, sir, is what I think most of us here still prefer to call ‘honour’” (107) と、この国ではそのようなアマチュアリズムを「名誉」と呼ぶのだと反論し、一同から大きな拍手を受けている¹⁴。しかしながら、スティーブンスが物語る現在において、ダーリントン卿は “a gentleman of great moral stature” (132) という評価とは真逆の状態に置かれ、反ユダヤ主義者 (anti-Semitic) であり、イギリスファシスト連合 (British Union of Fascists)¹⁵ と密接なつながりを持った人物として糾弾されている。ダーリントン卿が 1923 年の時点で見せたドイツに対する宥和政策への尽力は、1930 年代に深まっていくナチス (Nazis) との関係への布石となっていることは容易に想像できる。ルイスの批判の正当さは、1936 年の極秘会談を政治記者として内偵しに来たレジナルド・カーディナル (Reginald Cardinal) の “American chap was quite right” (234) という言葉によって裏書きされる。レジナルドは “His lordship is a gentleman” (234) と評しているが、ダーリントン卿は敗れた敵に対し寛大に振舞い、友情を示す本物のイギリス紳士であるがゆえに、その純粹かつ高貴な本能を利用してしまったのである。1936 年の会談においてダーリントン卿は、駐英ドイツ大使のリッベントロップに知らぬうちに利用され、レジナルドの言葉通り、結果としてヒトラーの “pawn” (233) の役割を果たしてしまう。この後、イギリス政府にナチス宥和政策を働きかけたダーリントン卿は新聞紙上で糾弾を受け、また戦後は名誉棄損訴訟を起こすが敗訴し、名誉が回復されぬまま失意のなか自ら命を絶つことになる。スティーブンスは、ダーリントン卿という高德なる紳士の下で、自分が歴史の流れに対する僅かながらの貢献を果たしてきたと満足感を覚えてきたが、その自負心の頂点と位置付けてきた 1923 年と 1936 年の二つの時点は、物語る現在において、スティーブンスの執事人生の全否定に結びつくほどの汚点を残す時に変わってしまったのである。ダーリントン卿がナチスの “pawn” であったとするならば、彼に盲従したスティーブンスは “the pawn of a pawn” (Parkes 38) に過ぎないのである。物語る現在に

において、ダーリントン卿に自分の人生を託してきたスティーブンスは、ダーリントン卿と同じように、自らの命に幕を引くことも否定できないほどの精神的不安を抱えた状況に置かれているといえるのではないだろうか。

6. イングランドの伝統的風景が果たす役割

イシグロは『遠い山なみの光』、『浮世の画家』、『日の名残り』と三作品連続で第二次世界大戦前後の時代を小説の背景に設定した理由について、次のように述べている。

I chose these settings for a particular reason: they are potent for my themes. I tend to be attracted to pre-war and post-war settings because I'm interested in this business of values and ideals being tested, and people having to face up to the notion that their ideals weren't quite what they thought they were before the test came. In all three books the Second World War is present. (Swift 22)

イシグロは予測できないほどのイデオロギーの変化する時代に翻弄される人間を描くことに興味関心があるようだ。これまで論じてきたように、『日の名残り』もまた、前二作と同様に第一次世界大戦（World War I）と第二次世界大戦の狭間という歴史の大きな転換期に、執事として生きることの意義を問いつづけたスティーブンスの物語である。

スティーブンスが執事の鏡として尊敬かつ見本とする父親のスティーブンス・シニアは、1851年に生まれている。この年ロンドンで開催された第一回万国博覧会（The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations）は、大英帝国の繁栄の象徴としての機能を果たす象徴的イベントであった。また、スティーブンス・シニアが執事として働き始めた1869年は、イギリスがいわゆる帝国主義政策を採る契機となった地中海と紅海を結ぶスエズ運河（Suez

Canal)が完成した年と重なる。スティーブンスは“what is a ‘great’ butler?” (29)を常に意識し、目標としているが、この“great”という言葉は容易に“Great Britain”と結びつけることができる。つまり、スティーブンスは、スティーブンス・シニアが執事として働いていた英国の繁栄の時代の執事像を旨としていたのである。一方、物語る現在である1956年7月には、エジプトの大統領ガマル・アブドゥル＝ナセル (Gamal Abdel Nasser 1918-1970) が、当時イギリスとフランスが支配権を握っていたスエズ運河の国有化を宣言し、その利益でナイル川上流にアスワン＝ハイダム (Aswan High Dam) を建設すると発表した。これに反発したイギリスとフランスは、イスラエルを動かしてスエズ運河に侵攻し、第二次中東戦争 (Suez War) を始めるが、国際世論はイギリスとフランスに厳しく、両国はスエズ運河のエジプトによる管理を認めざるを得ず、完全撤退することとなった。この戦争はまさに大英帝国が実質的終焉を迎えた時期と位置付けられている。

スティーブンスが執事の仕事に限界を感じる年と、大英帝国の実質的終焉を意味する第二次中東戦争の年が重ね描かれたことは、イシグロの意図したところであったのだろう。急速な時代の変化に追いつくことが出来ず、時代の流れに押し流され、一人ダーリントン・ホールに取り残されてしまった孤独な執事スティーブンスは、「自分はいったい何者なのだろうか」というアイデンティティ・クライシスに陥っていたのではないだろうか。このためスティーブンスは、過去の栄華に遡り、自分自身の執事としての誇りを取り戻し、人生をより良き方向に修正する旅が必要不可欠であったのである。

自分が執事として誇りを持つことができていたあの繁栄の大英帝国の1930年代に立ち戻るべく、スティーブンスはジェイン・サイモンズ夫人 (Mrs Jane Symons) の書いた『イングランドの驚異』 (*The Wonder of England*) というシリーズ本の第三巻を手に取り、旅に出かける。この本はスティーブンス自身も “They were written during the thirties, but much of it would still be up to date – after all, I do not imagine German bombs have altered our countryside so

significantly” (11-12) と述べているように、二十年以上も昔に書かれた出版物である。確かにイングランドの田園風景は時代の変化に移ろいにくいものであるが、地図としては必ずしも適当ではなく、どちらかと言えば過去の栄華に遡るためのガイドブックのような働きを果たしているように感じられる。ステューブンスは『イングランドの驚異』を手にして旅に出た一日目、バークシャー (Berkshire) との州境に車を止め、痩せた白髪 of 男 (a thin, white haired man) に紹介してもらった丘に登り、素晴らしい田園風景を目にする。

What I saw was principally field upon field rolling off into the far distance. The land rose and fell gently, and the fields were bordered by hedges and trees. There were dots in some of the distant fields which I assumed to be sheep. To my right, almost on the horizon, I thought I could see the square tower of a church. (26)

ステューブンスは丘の上から眺めた田園風景に感銘を受けているが、それはイングランドのステレオタイプ化された田園風景であるといえよう。物語る現在である1956年は、先述のとおり、大英帝国が実質的終焉を迎え衰退の一途を辿っていた時期であり、ダーリントン・ホールの退廃のみならず、多くのカントリー・ハウスが衰退の一途を辿っていた。カントリー・ハウスの衰退を受け、広大な敷地は切り売りされ、伝統的な田園風景も損なわれつつあった時代であり、「神話的イングランド」(mythic England) (Lewis 78) が崩壊しつつあった時代である。

一日目の旅を終え、ソールズベリー (Salisbury) の宿で休むステューブンスは、今朝眺めた風景を思い返し、改めて次のような感想を述べている。

... the English landscape at its finest – such as I saw it this morning – possesses a quality that the landscapes of other nations, however more

superficially dramatic, inevitably fail to possess. It is, I believe, a quality that will mark out the English landscape to any objective observer as the most deeply satisfying in the world, and this quality is probably best summed up by the term ‘greatness’. For it is true, when I stood on that high ledge this morning and viewed the land before me, I distinctly felt that rare, yet unmistakable feeling – the feeling that one is in the presence of greatness. We call this land of ours Great Britain, and there may be those who believe this a somewhat immodest practice. Yet I would venture that the landscape of our country alone would justify the use of this lofty adjective. . . . I would say that it is the very *lack* of obvious drama or spectacle that sets the beauty of our land apart. What is pertinent is the calmness of that beauty, its sense of restraint. It is as though the land knows of its own beauty, of its own greatness, and feels no need to shout it. (28-29)

ステーブンスはガイドブックとして『イングランドの驚異』を手にし、あえて多少の遠回りをして幹線道路を避け、イングランドの古い町や田園を通り、オックスフォードシャー州 (Oxfordshire) からコーンウォール州 (Cornwall) までを旅している。しかしながら、ステーブンスが旅の過程で見ている風景は確かに現実のイングランドではあるが、実は意図的に取捨選択された「神話的イングランド」となっている。それが証拠にステーブンスは、カントリー・ハウスの衰退について感想を述べることは皆無であるし、旅の過程においても、デヴォン州の南半分に広がるダートムーア (Dartmoor)¹⁶ の原野を必ず通っているであろうにもかかわらず、イングランドの意外な風景美の最たるもののひとつであるダートムーアに受けた感銘をいっさい語っていない。(安藤 176) ステーブンスは、白髪の人に紹介してもらい登った丘の上から眺めた田園風景に対し、「偉大」(*greatness*) であると感想を述べるばかりである。それはステーブンスの旅の目的が、『ナショナル・ジオグラフィック・マガジン』

(*National Geographic Magazine*)などに掲載されているような壮大な溪谷や大瀑布、岬々たる山脈とは異なり、なだらかに起伏しながら、どこまでも続く草地と畑、点在する羊、地平線に見える教会の塔に象徴される華やかなる自己表出をすることのないイングランドの伝統的田園風景を自己に投影し、「偉大な執事」(*great butler*)のみならず、大英帝国(*Great Britain*)と結びつけることにあるためである。

物語る現在において、スティーブンスは、時代と共に変わりゆく社会的価値観や自分自身の境遇に追いつくことができず、大きな精神的不安を抱え、アイデンティティ・クライシスの状態に陥っている。スティーブンスは、大英帝国繁栄の象徴として残存する伝統的な田園風景を自分と意識的に重ね合わせて確認することで、自分のこれまでの行動が誇りあるものであり、また物語る現在においても、偉大なる執事であり続けているのだという自信を確認するべく、サイモンズ夫人の『イングランドの驚異』を手にも旅に出たのではないだろうか。

7. 結論

スティーブンスは旅の四日目の午後から六日目の夕方までの記録を残していない。スティーブンスが語る四日目の旅の記録は、スティーブンスがコーンウォール州リトル・コンプトンのローズガーデンホテル(*Rose Garden Hotel*)に到着し、レストランから外の雨の様子を眺め、ミス・ケントンとの待ち合わせ時間である午後三時を待っているという場面で終わっている。再び旅の記録がスティーブンスによって語られるのは、六日目の夕方、ドーセット州ウェイマス(*Weymouth, Dorset*)の棧橋で夕日が沈むのを眺めている時である。これまで論じてきたように、スティーブンスの旅の目的は、自分のこれまでの執事としての行動が誇りあるものであり、物語る現在においても、偉大なる執事であり続けているのだという自信を確認することにあった。その目的を達成するための一方策として、スティーブンスは、ダーリントン卿の下で、自らが偉大

なる執事として活躍していた頃の仲間であるミス・ケントンを邸に連れ戻すことにより、過ぎ去った過去を取り戻すことを考えていた。しかしながら、再会を果たしたときに発せられたミス・ケントンの“*I do love my husband*” (251)という言葉と、“*After all, there’s no turning back the clock now. One can’t be forever dwelling on what might have been. One should realize one has as good as most, perhaps better, and be grateful*” (251)という言葉は、ステーブンスにとって、大変ショックをもたらすものであった。

I do not think I responded immediately, for it took me a moment or two to fully digest these words of Miss Kenton. Moreover, as you might appreciate, their implications were such as to provoke a certain degree of sorrow within me. Indeed – why should I not admit it? – at that moment, my heart was breaking. (251-52)

つまり、ステーブンスは、ミス・ケントンと再会し、二度と過ぎ去った過去を取り戻すことが困難であると認識をするに至ったのである。これはアイデンティティ・クライシスに苦しむステーブンスにとって、自己調整の失敗を意味するものであり、その衝撃の大きさから、五日目の旅の記録を残すことができなかつたものと解釈できる。ステーブンスにとって旅は、過去の栄華に遡り、自分自身の執事としての誇りを取り戻し、人生をより良き方向に修正することにあつた。したがって、ミス・ケントンとの再会は、旅の目的を達成するための記録としてふさわしいものではなく、ステーブンスにとっては都合の悪い時間にすぎなかつたことから、恣意的に旅の五日目の記録を残さなかつたとも解釈することができる。

ミス・ケントンとの再会を終えたステーブンスは、ダーリントン・ホールにすぐに戻らず、ウェイマスに立ち寄り、のんびりと休暇を過ごしている。

I arrived in this town yesterday afternoon, and have decided to remain a second night here so as to allow myself this whole day to spend in a leisurely manner. And I must say, it has been something of a relief not to be motoring; for enjoyable though the activity can be, one can also get a little weary of it after a while. In any case, I can well afford the time to remain this further day here; an early start tomorrow will ensure that I am back at Darlington Hall by teatime. (243)

旅行前、スティーブンスは「偉大なる執事」であることを旨とし、邸にいることこそ、最良のイギリスを見る機会であると考え、数日の休みも取得することなく執事業に精を出し続けていたことを鑑みると、この決断は、単なる休暇を楽しむために為されたものではなく、スティーブンスにとってウエイマスに立ち寄りざるを得ない何らかの理由から生じさせたものであると考えられる。それはミス・ケントンを邸に連れ戻すことにより、過ぎ去った過去を取り戻すという旅の目的を達成できなかったスティーブンスが、ウエイマスの地で旅の目的を達成しようと試みたためではないだろうか。それが証拠に、スティーブンスは、『イングランドの驚異』を参考にウエイマスの地を訪れている。

ウエイマスは、ジョージ三世 (George III 1738-1820)¹⁷ の治世から産業革命による経済の発展が成熟に達した大英帝国の絶頂期であるとみなされているヴィクトリア朝時代 (Victorian era 1837-1901) にかけて、バース (Bath)、エプソム (Epsom)、タンブリッジ・ウェルズ (Tunbridge Wells) などの温泉地に代わり、上流階級の人々が訪れる海濱行楽地として栄え、その後、19世紀半ばに本格的な鉄道時代が到来すると、その下の階層にも人気の海濱行楽地へと発展を遂げた。また同時に、ウエイマスはドーバー海峡 (Strait of Dover) を渡るフェリーの港でもあることから、潮の干満にかかわらず、船舶をつないで荷物の積み下ろしや人々の上下船を容易に行うことができるように、棧橋 (pier) が設けられたが、行楽客による突堤散策の流行により、乗下船のため

だけでなく行楽客の散策用にも利用することができる遊歩棧橋 (pleasure pier) の整備が行われた。ウェイマスのような海浜リゾートは、第二次世界大戦前までは賑わいを見せたが、戦後においては個人を対象とする海外パッケージ旅行が主流となり、その人気は急激に陰りを見せることになる。(平林 32) しかしながら、スティーブンスが再び語り始めた旅の六日目のウェイマスの遊歩棧橋は、未だ行き来する人々の足音が一瞬たりとも途絶えることのないほどの人気を見せている。つまり、ウェイマスは大英帝国の繁栄の名残りをみせる地であり、スティーブンスが執事として誇りを持って生きることできたあの繁栄の 1930 年代に立ち戻らせ、物語る現在における精神的不安を解消させる役割を果たす地なのである。ミス・ケントンを邸に連れ戻すことにより、過ぎ去った過去を取り戻すという旅の目的を達成できなかったスティーブンスにとって、ウェイマスは目標達成のためにどうしても訪れなければならない地だったのである。

スティーブンスは、棧橋近くのベンチで六十代後半と思われる太り気味の老人に声をかけられる。この老人は三年前に執事を引退し、身体の不調を訴えるなど、年齢的にも経歴的にもスティーブンスと共通点がみられる。スティーブンスは三年前にダーリントン卿を亡くし、老いにより執事としての役務を十分に果たすことが難しくなっている。このような共通点が影響してか、スティーブンスは元執事の老人に “I gave my best to Lord Darlington. I gave him the very best I had to give, and now – well – I find I do not have a great deal more left to give” (255) と、自らが執事を続ける意欲も自信も喪失している状態にあることを涙ながらに吐露する。元執事の老人はスティーブンスに次のように助言している。

‘Now, look, mate, I’m not sure I follow everything you’re saying. But if you ask me, your attitude’s all wrong, see? Don’t keep looking back all the time, you’re bound to get depressed. And all right, you can’t do your job as well as

you used to. But it's the same for all of us, see? We've all got to put our feet up at some point. Look at me. Been happy as a lark since the day I retired. All right, so neither of us are exactly in our first flush of youth, but you've got to keep looking forward. . . . You've got to enjoy yourself. The evening's the best part of the day. You've done your day's work. Now you can put your feet up and enjoy it. That's how I look at it. Ask anybody, they'll all tell you. The evening's the best part of the day.' (256)

元執事の老人は、ステューブンスが望めば執事を引退することができ、のんびり余生を過ごす選択肢もあるのだということを示している。ステューブンスは、元執事の老人の助言に対して、“Perhaps, then, there is something to his advice that I should cease looking back so much, that I should adopt a more positive outlook and try to make the best of what remains of my day” (256) と述べていることから、一見、元執事の老人の助言を受け入れ、前向きに生きること、つまり自らの老いを認め、執事業の引退を決意しているかのように思われる。しかしながら、この後、ステューブンスは “when I return to Darlington Hall tomorrow – Mr Farraday will not himself be back for a further week – I will begin practising with renewed effort” (258) と執事としての新たな決意を示し、引退する意志など全く抱いていないことを明確にする。確かに元執事の老人の “The evening's the best part of the day” (256) という発言を受けて、ステューブンスは “the evening is the most enjoyable part of the day” (256) と述べていることから、二人の発言は表面的には一致しているように思われる。しかしながら、実際には元執事の老人の「夕方」が引退後の余暇の充実感を意味しているのに対し、ステューブンスの「夕方」は執事としての最盛期を過ぎた自分に残された時間という意味に読み替えて解釈されているのである。このようにステューブンスは、元執事の老人の忠告を読み替えることで自己調整を図り、物語る現在において、執事としての精神的不安を解消することに成功するのである。そして、ダーリント

ン・ホールに戻ったステイーブンスは、再び自らの運命を主人の手に委ね、執事職を全うすることになるのである。

※本論文は2015（平成27）年度に交付を受けた松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。

註

1 イシグロはF. X. フィーニー (F. X. Feeney) との対談において、“I thought a butler was a good way to look at English life” と指摘している。

2 代表的な批評家にロシオ・ディヴィス (Rocio G. Davis) がおり、彼は『日の名残り』について “But it is in *The Remains of the Day* that the writer reveals his own Japanese subtlety as he revisions Japan in a novel that is not even set in Japan but has as its theme six unexceptional days in the life of that most English of characters, a butler. Himself a between-world critic, Pico Lyre considers this novel, among the many books that purport to explain Japan to the West, “the most revealing one so far” *The Remains of the Day* is, as its title suggests, written in that favourite Japanese form, the elegy for vanished rites; it is a vespers novel. Through the recollections of the protagonist’s, Stevens’s, years of service at Darlington Hall, Ishiguro will reveal essential aspects of the Japanese character” (144) と述べている。

3 ステイーブンスは、第一次世界大戦後の1918年からダーリントン・ホールで働き始めている。

4 イシグロはステイーブンスの執事業に対する姿勢を “I think he’s in danger of turning himself into something less than human partly because he’s got this sense of perfectionism. It’s this kind of terribly misguided sense of perfectionism, which, if he actually achieves it, would actually mean turning himself into something less than human” と述べている。(Vorda 33)

5 物語る現在において、ステイーブンス、ミセス・クレメンツ (Mrs Clements), ローズマリ (Rosemary), アグネス (Agnes) の四名がダーリントン・ホールに住み込みで勤務しているほか、園丁が週一、二回、掃除婦二名が週二回応援に来ている状況にある。

6 デイヴィッド・ロッジ (David Lodge) が『小説の技巧』(*The Art of Fiction* 1992) において『日の名残り』の語り手について「信頼できない語り手」という表現を用いてからは(154-157)、イシグロ作品の書評には決まって「信頼できない語り手」という表現が使われるようになった。

7 ケントンの手紙に示された未来に対する虚無感がステイーブンス自らのものであると指摘している批評家は複数存在する。ブライアン・シェーファー (Brian W. Shaffer) は “When Stevens Concludes . . . that Kenton’s life has come to be ‘dominated by a sense of waste,’ he in fact describes his own life and work” (81) と指摘する。シンシア・ウォン (Cynthia F. Wong)

は “In other words, he begins to associate her impressions with his own, so that, when she writes, ‘I have no idea how I shall usefully fill the remainder of my life . . . and that the ‘rest of my life stretches out as an emptiness before me’, he could well be identifying a condition of his own existence” (57) と指摘する。キャスリーン・ウォール (Kathleen Wall) は “The loss and waste of which he speaks may indeed be hers; but just as certainly they belong to him. The text itself offers grounds for such an interpretation, since when he tells her that she has written about a life that “stretches out like an emptiness before me” she denies her ability to make any such statement” (29) と指摘する。

8 1919年6月28日、パリ講和会議 (Paris Peace Conference 1919) の結果、パリ郊外のヴェルサイユ宮殿鏡の間 (The Hall of Mirrors in the Versailles Palace) で調印され、1920年1月10日に発行した第一次世界大戦の連合国とドイツの間の講和条約をいう。ヴェルサイユ条約の精神は、フランスによるドイツに対する報復という面が強く表れ、トマス・ウッドロウ・ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson 1856-1924) の国際協調の精神は国際連盟規約 (Covenant of the League of Nations) 第1編に生かされるに留まった。また、ウラジーミル・イリイチ・レーニン (Wladimir Iljitsch Lenin 1870-1924) が「平和に関する布告」 (“Decree on Peace” 1917) で提唱した無賠償及び無併合の理念も完全に無視された。

9 ヴェルサイユ条約により、ドイツはポーランド、ベルギー、チェコスロヴァキア、リトアニアに領土の一部を割譲させられ、戦前の面積及び人口の十パーセントを失った。このほかにも、いっさいの海外植民地の放棄、将来にわたるオーストリアとの合併の厳禁、軍備制限、ラインラント (Rhinland) における軍事施設と駐兵の禁止、莫大な賠償金が求められた。このような敗戦国ドイツに苛酷な負担を強いたヴェルサイユ体制 (Versailles Settlement) は、1933年にドイツでヴェルサイユ体制の打破を掲げるヒトラー政権 (the Hitler Administration 1933-1945) を樹立させるきっかけとなる。同体制は1936年にドイツがロカルノ条約 (Locarno Treaties 1925) を破棄してラインラントに進駐したことによって崩壊する。

10 イギリスの経済学者。有効需要論、乗数理論及び流動性選好説を柱とする名著『雇用、利子及び貨幣の一般理論』 (*The General Theory of Employment, Interest and Money* 1936) により、失業と不況の原因を明らかにして完全雇用達成の理論を提示し、後にケインズ革命と呼ばれる近代経済学の変革をもたらした。この理論を基礎として、自由放任主義の経済に代わって政府による経済への積極的介入を主張、修正資本主義の理論を展開して今日の経済政策に大きな影響を及ぼした。他著書に『平和の経済的帰結』 (*The Economic Consequences of the Peace* 1920)、『貨幣改革論』 (*A Tract on Monetary Reform* 1923)、『貨幣論』 (*A Treatise on Money* 1930) などがある。

11 イギリスの小説家及び評論家。進化論や社会主義の観点に基づく社会小説及び文明批評を発表したほか、空想科学小説 (Science Fiction) の祖として有名である。代表的著書に『世界文化史大系』 (*The Outline of History* 1920)、小説に『タイムマシン』 (*The Time Machine* 1896)、『宇宙戦争』 (*The War of the Worlds* 1898)、『アン・ヴェロニカの冒険』 (*Ann Veronica*

1909) などがある。

12 1936年8月から駐英ドイツ大使を務める。駐英ドイツ大使以前から、彼はイギリスが親独路線をとるべく影響を与えることを目的に、かつて首相を務めたデビッド・ロイド・ジョージ (David Lloyd George 1863-1945) に代表されるイギリス上流階級の枢要な人々に接触し、ヒトラーと面会させることを試み、一定の成功を取っていた。

13 1935年に成立したボールドウィン内閣から、イギリスはヨーロッパにおけるナチスドイツの反ヴェルサイユ体制の動きや、アジアにおける日本の中国進行などに対して、積極的に非難せず、むしろそれを黙認するという姿勢をとっていた。当時イギリスにとって脅威はソ連と考えられており、ソ連を封じ込めるためにドイツと日本を利用できると判断していた。このような外交政策としての宥和政策は、ヒトラーのナチスドイツがヴェルサイユ条約に違約して再軍備に踏み切ったことに対し、ストレーザ戦線 (Fronte di Stresa 1935) で抗議しながら、一方で単独でドイツと交渉して英独海軍協定 (Anglo-German Naval Agreement 1935) を締結し、ドイツに一定の軍備拡張を認めることによって、それ以上の要求を抑えられると判断したことに明確に見られる。ジョージ6世は、即位直後、大英帝国を守るという見地から、この宥和政策を支持していた。

14 小野寺健はこのダーリントン卿の発言にある“honour”を「信義」と訳し、個人的信義こそ、ダーリントン卿の人生観の根本であると同時にイギリス文化の伝統の根本であると指摘している。(97)

15 オズワルド・モズレー (Sir Oswald Ernald Mosley 1896-1980) が1932年に設立したファシスト政党。

16 デヴォン州南部に広がる湿原地帯であり、ダートムーア国立公園 (Dartmoor National Park) として保護されている九百五十四平方キロメートルの面積を持つ広大な荒野。

17 ジョージ三世は、1789年にウェイマスで海水浴をしている。(平林 60)

引用文献

安藤聡「カズオ・イシグロ『日の名残り』——精神的イングランドの崩壊——」『愛知大学文学論叢』135 (2007): 165-185. Print.

青木保「英国文学の若き旗手」『中央公論』中央公論社 (1990.3): 300-09. Print.

新井英夫「読み替えの物語としての『遠い山なみの光』——エツコの自己物語によるケア——」『越境する英米文学——人種・階級・家族——』音羽書房鶴見書店, 2014. Print.

新井英夫「自己物語によるケア——『浮世の画家』におけるオノの語りを巡って——」『イギリス文学の悦び』大阪教育図書, 2014. Print.

Davis, Rocio G. “Imaginary Homelands Revisited in the Novels of Kazuo Ishiguro.” *Miscelanea: A Journal of English and American Studies* 15 (1994): 139-54. Print.

平井杏子『カズオ・イシグロ：境界のない世界』水平社, 2011. Print.

池田雅之『イギリス人の日本観』河合出版, 1990. Print.

- 平林美都子「英国の近代ツーリズム（その1）」『愛知淑徳大学大学院論文集』3（2011）：51-61. Print.
- 平林美都子「英国の近代ツーリズム（その2）」『愛知淑徳大学大学院論文集』4（2012）：25-35. Print.
- Ishiguro, Kazuo. *The Remains of the Day*. London: Faber & Faber, 1989. Print.
- “Kazuo Ishiguro with F. X. Feeney”, Wednesday, October 11, 2000 at the Writer’s Guild Theatre, Los Angeles. <http://www.writersblocpresents.com/archives/ishiguro/ishiguro.htm>
- Lewis, Barry. *Kazuo Ishiguro*. Manchester: Manchester UP, 2000. Print.
- Lodge, David. *The Art of Fiction: Illustrated from Classic and Modern Texts*. London: Penguin, 1992. Print.
- Lyre, Pico. “Waiting Upon History.” *Partisan Review* 58-3（1991）：585-89. Print.
- 小野寺健「現代英国小説における歴史と個人——Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day* を中心に」『横浜市立大学論叢人文科学系列』横浜市立大学学術研究会 44（1993）：93-104. Print.
- 大野和基「インタビュー カズオ・イシグロ——『わたしを離さないで』そして村上春樹のこと」『文學界』文藝春秋社（2006.8）：130-46. Print.
- 柴田元幸『柴田元幸と9人の作家たち：ナイン・インタビューズ』アルク，2004. Print.
- Parkes, Adam. *Kazuo Ishiguro’s The Remains of the Day: A Reader’s Guide*. New York: Continuum, 2001. Print.
- Shaffer, Brian W. *Understanding Kazuo Ishiguro*. Columbia: University of South Carolina Press, 1998. Print.
- Swift, Graham, “Kazuo Ishiguro.” *Bomb* 29（1989）：23. Print.
- Voda, Allan and Kim Herzinger. “An Interview with Kazuo Ishiguro.” *Conversations with Kazuo Ishiguro*. Ed. Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong. University Press of Mississippi, 2008. 66-88. Print.
- Vorda, Allan, Ed., *Face to Face: Interviews with Contemporary Novelist*. Houston: Rice UP, 1993. Print.
- Wall, Kathleen. “*The Remains of the Day* and Its Challenges to Theories of Unreliable Narration.” *Journal of Narrative Technique* 24（1994）：18-42. Print.
- Wong, Cynthia F. *Kazuo Ishiguro*. Tavistock: Northcote, 2000. Print.